

## 台湾研修での体験

電気電子情報工学科 唐澤 拓也

私は、今年と昨年の2回、台湾の明道大学で行われる研修に参加させていただきました。楽しい事が沢山あったのですが、一番印象に残ったイベントはランタンフェスティバルです。この行事は毎年、台湾の各地を回り、その年の干支をモチーフにした大きなランタンや現地の学生が作製したランタンを展示し、その美しさを競い合います。この行事は作製した団体やその関係者だけでなく一般の人々も参加できます。昼間（ライトアップ前）と夕方（ライトアップ後）の全く違う雰囲気に感動しました。

続いて印象に残ったのが大学の近くにある夜市です。日本の夏祭りのような感じで、沢山の屋台が並んでとても賑やかで楽しい雰囲気でした。台湾では小さな町や大きな都市にも夜市があり 22~23 時まで営業しています。ここでは色々な品物や食べ物が売られているのですが、その中でも有名な物は臭豆腐（日本でいう納豆の様なものでさらに匂いが強烈である）や豚の血のケーキなど台湾・香港・中華圏独特の物から日本の信玄餅の様な物（水信玄餅と呼ばれていた）やビーフステーキなどです（値段はほとんどの物が日本より安く感



じました）。

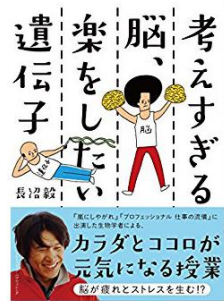
学習面では初歩から中国語の発音練習を行い、きちんと発音できるまで繰り返し練習させられました。さらに、専門授業（バイオ、土壌の授業）も現地の人と一緒に、説明はすべて中国語で行われました。この様に自分自身が中国語を使わざるを得ない状況に置かれることで更なる語学力アップを図る授業でした（どうしても分からないところは現地の通訳の学生さんが助けてくれます）。おかげで最後には夜市でなんとか意思疎通が出来るまでになりました。（購入したから揚げの味は美味でした）

最後に本研修を振り返ってみると学習も、遊びも、とても充実した研修で、26 日間はあっという間に過ぎてしまいました。行くたびに新たな経験をさせてくれる台湾、何度でも行きたくなりました。

### 学生のおすすめ本

**長沼 毅**  
『考えすぎる脳、楽をしたい遺伝子』  
応用バイオ科学科 杉山 聡美

長沼毅著  
『考えすぎる脳、楽をしたい遺伝子』  
クロスメディア・パブリッシング  
図書館2階書架に所蔵  
(請求記号 491.3711N)



『脳と遺伝子』と聞いて、皆さんは何を想像しますか。自分の頭や DNA の二重らせん構造を思い浮かべる人もいるかもしれません。私がこの本を見つけたのは、図書館でアルバイトをしている時でした。本棚に返却本を戻す作業をしていた際に、専門書にしては馴染み易い絵が描かれた表紙に惹かれて手にとりました。

読んでみると、まず著者は人の抱く悩みや不安を「脳」の進化上の不都合と捉え、より本質的な遺伝子の作用から、身近な行為や情動の仕組みを解き明かしていきます。そして生物として本来の「自然な（楽な）」生き方を提案します。

私は日頃ゼミや実験から、遺伝子を生化学的な視点で捉えがちだったので、この考えはとても新鮮でした。例えば電車の中で居眠りをした経験は誰もが一度はあるでしょう。これは日本人特有の遺伝子が関連していると解説されています。私自身、海外旅行をした際に現地で乗った電車の中で、寝て

いる人が誰もいなかったことを思い出し、とても腑に落ちる思いでした。また人間としての特性だけでなく、歌や運動の得手不得手など「個性」さえも遺伝子が決定づけるとしています。著者は、その凹凸のある人のそれぞれの特徴を「遺伝的なランドスケープ（風景）」と呼んでいます。さらにそれを自ら知り、その上で自分の性質にあった環境を見つけ出すことが重要だと説きます。

遺伝子を見つめることで、自分の強い部分と弱い部分を受け入れて、自らを知り素直に生きる。そんな新しい視点を感じる事が出来ました。

本書は、私と同じ分野で勉強をしている人や予備知識のある人には、興味を掻き立てられる内容です。逆に遺伝子や脳の機能を縁遠いと感じている人には、より身近に感じさせてくれる本だと思います。

# 図書館 Café



第6号  
Vol.6 No.1

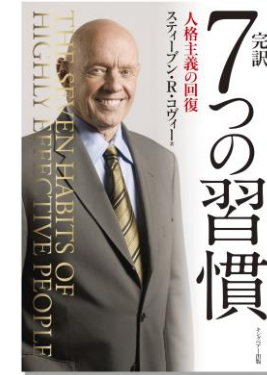
発行 / 神奈川工科大学附属図書館 2017.3.31

## 読書後の小さなパラダイムシフト

教育開発センター所長  
井上 哲理

「パラダイムシフト」は20世紀の科学史家トーマス・クーンが『科学革命の構造』の中で使った言葉です。ここでのパラダイムとは自然を研究する際の「お手本、教科書」のような意味で、科学の飛躍的な進歩にはパラダイム（お手本）のシフト（変更）が必ずあるという説明がなされています。自然科学におけるパラダイムシフトの有名な例は16~17世紀に起こった天動説から地動説への変更です。当時発明された望遠鏡での観察結果が大きな影響を与えました。その後、パラダイムは「考え方の枠組み」という広い意味でさまざまな分野で使われるようになりました。有名なビジネス書『7つの習慣』（スティーブ・R・コヴィー）では、人生の課題解決でのパラダイムシフトの重要性が述べられています。

私自身は『科学革命の構造』を大学院生修了頃に読みましたが、内容の理解はともかく、パラダイムシフトという言葉が記憶に残りました。それは、本から、新しい考え方の枠組みを知って、読書後にそれまでとは物事が違って見えるような経験が何度かあ



スティーブ・R・コヴィー著  
フランクリン・コヴィー・ジャン訳  
『完訳7つの習慣：人格主義の回復』  
キングベア出版

図書館2階書架に所蔵(請求記号 15911C)



ったからだと思います。例えば、『自由からの逃走』（エーリッヒ・フロム）を読んだ後に「自由」に対する見方が変わった、などです。最近でも、『選択の科学』（シーナ・エイエンガー）の読書後に、「選択の幅」に対する見方が変わりました。少し前に話題になった『もしドラ』\*では「企業」への見方が少し変わりました。

読んだ本すべてで、このような経験をするわけではありません。また、人生が劇的に変わるほどの経験も起こりませんが、読書後の小さなパラダイムシフトは、私の読書の楽しみのひとつとなっています。そんな本にこれからも出会えれば、と思っています。

\*『もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの『マネジメント』を読んだら』 岩崎夏海著 ダイアモンド社 (請求記号 913.611D)

## 学生時代のこの一冊

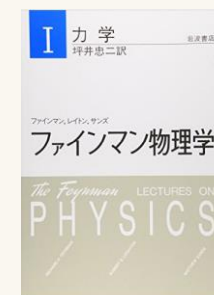
ファインマン、レイトン、サンス著 坪井忠二訳  
『力学』

基礎・教養教育センター 准教授 神谷 克政

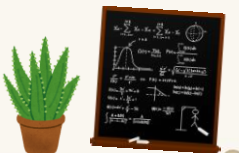
この本に出会ったのは大学1年の前期。生物専攻の私が、力学の授業を理解できずに良い教科書を探していたときのこと。表紙裏には「米国の理工系大学の1、2年生向けの入門書」とある。海外の大学への憧れもあり、この本を手にした。

この偶然の出会いがその後の進路を決めるきっかけになった。第1章「踊るアトム」を読んで自然現象を原子レベルで理解することの面白さに感銘を受けていたため、卒業研究では分子生物学の研究室を選んだ。第3章「物理学と他の学問

との関係」を読んで生物学と物理学の関係に興味を持っていたため、大学院では計算物理学の研究室を選んだ。というわけで、私も一冊の本との奇遇な出会いで人生が決まった一人。皆さんも素敵な本との出会いを求めて図書館に行ってみては？



ファインマン、レイトン、サンス著  
坪井忠二訳  
『力学』 岩波書店  
図書館2階書架に所蔵  
(請求記号 420.811F)

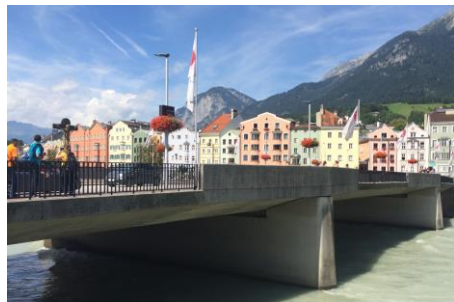


## インスブルック (Innsbruck)

情報メディア学科 教授 佐藤 尚

インスブルックには、2014年の8月にインスブルック大学を会場として開催された International Conference on Geometry and Graphics(ICGG)という学会に参加するために訪れました。

インスブルックは、オーストリア共和国の都市で、オーストリア西部に位置するチロル地方の州都です。ある程度の年齢の方には、1964年と1976年に冬季オリンピックが開催された都市として記憶されているかもしれません。冬季オリンピックが開催されるような都市なので、当然冬場の気温はかなり低くなりますが、夏場でも平均気温が13℃程度です。人口は厚木市よりもかなり少ない12万人弱です。2020年の東京オリンピックを開催するのに、3兆円以上かかるのではないかとされていることを考えると、こんな小さな都市で開催されたのは、ちょっとビックリです。



イン川沿いの町並み

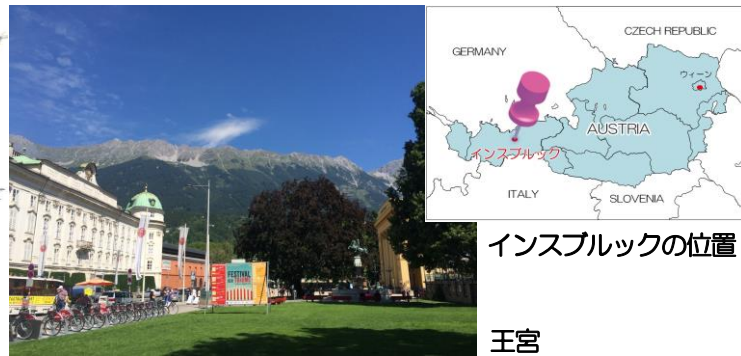


黄金の小屋根

オーストリアには、ドナウ川の支流の一つイン川があります。イン川は全長500kmを超え、オーストリア、スイス、ドイツにまたがって流れています。インスブルックという地名は、「イン川の橋」という意味になっています。市の中心部近くイン川沿いには、きれいな町並みが続いています。

参加した学会の名称であるICGGで使われているGeometry(幾何学)という言葉は、日本語とは少し異なっていると思います。大学において、少し前に機械系や建築系を専攻された方には、なじみの深い図学(図法幾何学)に近い使われ方をしています。オーストリアにおいては、日本の大学において半年程度で教えられているような内容の図法幾何学が、高校で選択科目として教えられているそうです。インスブルック大学の土木工学科においても、CADを含む図学関連の教育・研究に携わる教員がおり、その方たちがホストとして活躍されていました。大学の一部の施設は市内にもあり、徒歩数分で観光スポットにも行くことが可能でした。

学会の会場となった建物の前の道を数分歩くと、1463年に建築されたハプスブルク家の王宮にたどり着きます。現在では博物館となっていて、見学をすることができます。チロル最大級の天井



インスブルックの位置

王宮

がある大広間、そこにある豪華なシャンデリア、マリア・テレジアの「謁見の間」に置かれた王座などが見学できます。

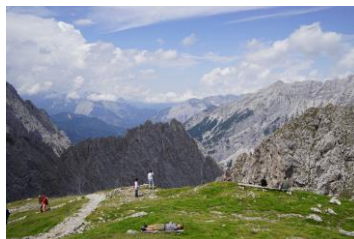
王宮の背景に山並みが見えていることからわかるように、インスブルックはアルプスの山々に囲まれている自然豊かな都市です。王宮の前の通りを少し歩くとノードケトゥーブルカーの駅が見えてきます。このケーブルカーに乗ると、海拔300m程度に位置するフンガーブルク駅に到着します。その後、別のケーブルカーに乗り換えると海拔1,600mにあるゼーグルーベ駅に到着します。この駅の近くには食堂などもあり、美しい谷や山々を見ながら食事をとることも出来ます。さらにケーブルカーを乗り継ぎ、少し歩くと海拔2,255mにある頂上のハーフェレカー展望台に到着します。

ここからは、インスブルックの街並みと自然豊かなアルプスの山々を同時に見ることができます。よく見ると、ケーブルカーを利用せずに徒歩で登山している人や、自転車を使って山を登っている人が見つかります。

王宮の前の通りをケーブルカーの駅とは反対方向に歩いて行くと、観光客であふれかえっている旧市街になります。旧市街には、沢山のカフェやレストラン、様々な種類のお店があります。

旧市街の有名なスポットの一つに、黄金の小屋根と呼ばれる建物があります。これは15世紀末にマクシミリアン1世の再婚を祝って造られたものです。このため、黄金の小屋根のすぐ下には、マクシミリアンの人生の場面を描いたレリーフが置かれています。この建物の中には博物館が入っており、建設当時の生活を知ることができます。

インスブルックは自然に恵まれた、とても気持ちの良い町でした。滞在中は天候にも恵まれ、気持ちよく学会に参加することができました。インスブルック周辺には山のリゾート村などもあるので、機会があれば再度訪れたいと思っています。



山頂からの風景

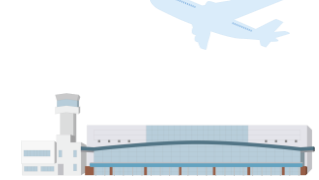
## 先生おすすめの一冊

### 新津 春子

『清掃はやさしさ 世界一清潔な空港を支える職人の生き様』  
臨床工学科 助教 渡邊 晃広

清潔な空港世界一と聞いて「羽田空港」のことだ、と知っている学生はどれくらいいるでしょう？イギリスにあるSKYTRAX社が実施する国際空港ランキングで、2013年、2014年、2016年と『世界で最も清潔な空港』という栄冠に輝いた羽田空港。この本には、そこで働く清掃員500人を統括する「清掃のプロ」新津春子さんの現在に至るまでの経験が随所に盛り込まれています。新津さんは、中国残留日本人孤児二世として中国に生まれ、渡日して清掃という仕事に就いてから現在まで様々な苦勞を乗り越えて今の立場に立っています。

中国から日本へ来てからの苦悩、清掃員として働き始めてからの葛藤、清掃のプロを目指すための一歩を踏み出すきっかけ、自分に足りないものへの気づき、それらを支えてくれる人の大切さや恩人の死まで、環境や目指す仕事は違えど、いま大学生



新津春子著  
『清掃はやさしさ 世界一清潔な  
空港を支える職人の生き様』  
ポプラ社  
図書館2階書架に所蔵  
(請求記号 289.11|N)

である皆さんがこれからの大学生活、就職して社会に出てから経験していくであろう内容に是非一度は目を通していただきたいと思います。本書のおわりに、「人やモノに対する思いやりこそ、よい清掃の原点です。・・・」という1文があり、私の場合、清掃を「医療」に置き換えるとより共感できます。この本を通じて、みなさんが現在目指していることやいまの自分を形作っている原点を振り返ってみてはいかがでしょうか？

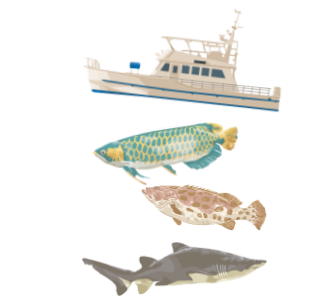
## 先生おすすめの一冊

### 落合 芳博

『食べられる深海魚ガイドブック』  
応用バイオ科学科 助教 小澤 秀夫

深海魚を食べるという観点でまとめたのが本書である。皆さんは、深海魚と言ってもどのような魚を思い浮かべるだろうか。目が退化しており、体色は薄く、口が大きく、ぶよぶよしていて、食用に向かなさそうな魚を思い浮かべるだろうか、それともキンメダイのような高級魚を思い浮かべるだろうか。深海とは200mより深い海であり、深海魚というのは深海に棲む魚と定義できるが、本書で扱っているマグロやタチウオなどは鉛直移動を行い、深海と浅海を行き来する。このように深海魚に限らず、言葉を正確に定義することは難しい。

大きな魚介類は美味しくないという先入観を持つ人も多いと思うが、タカアシガニは美味しい。ぜひ沼津に行ったときは、食べてみて欲しいと思う。カニ類が好きの人には、その味と量に必ず満足ができるだろう。カニの次はエビだが、アカザエビ



落合芳博監修  
21世紀の食調査班編  
『食べられる深海魚ガイドブック』  
自由国民社  
図書館2階書架に所蔵  
(請求記号 664.61|T)

や通称アマエビのホッコクアカエビは深海に棲むエビである。生で食べるとおいしいエビは深海のものが多く、加熱して食べるエビは浅海性のものが多いように思う。

本書はレシピ集ではなく、味付けは皆さんの腕前と勘が試されるが、もし珍しい深海魚が手に入った場合は、本書を参考に料理をしてみるとよいだろう。写真も多く読みやすい本であるので、ぜひ皆さんも読み、魚介類に対する愛情を育んで欲しい。